

# はじめに

## 本書の目的

本書は、第2言語習得の研究成果を指導・学習の現場に還元することを目的としています。現職の英語指導者、指導者を目指す方、教職課程を履修している大学学部生・大学院生、心理言語学や言語教育学に関心のある方、そして学習者の皆さまの参考になるよう、様々な研究結果に基づいて、言語理解・習得のメカニズムをわかりやすく解説し、指導の一例を紹介しています。

## 本書の構成

英語学習者が、英語を流暢に運用できるようになるためには、その基盤となる技能(英語の音声・文字・単語・文法の効率的な処理)を熟達させることが必須です。本書では、各処理段階における熟達化メカニズムと指導法を順に紹介しています。まず、第1章と第2章では音声を、続いて第3章では識字を、第4章と第5章では語彙を取り上げます。続く第6章、第7章及び第8章では、単語より大きな単位である定型表現(定型連鎖)から文単位までを扱っています。第9章と第10章では、指導理論と指導方法に焦点を当て、英語(学習言語)による指導と技能統合型の指導を紹介しています。最後の第11章では、第2言語習得の根本に立ち戻り、習得を促進させる私たちの脳、認知脳と社会脳のしくみを紹介しています。

## 各章の構成

各章の冒頭に、「この章で学ぶこと」として内容の概要を記しました。

### ■自己診断テスト(○か×をご記入ください)

読み始める前の時点で、自分はどのように考えているのかを確認するために回答してみましょう。本文中に正解と解説を示しています。

## ■習得の理論と指導法

各章では、理論を示したうえで、基本的な指導の一例を紹介しています。理論をしっかり理解し、指導例を参考に、指導対象者に適した指導方法を考えていただくことを意図して、あえて詳細な指導案等を掲載していません。

## ■本章における学習の到達状況を確認しよう

章冒頭の「この章で学ぶこと」に準拠したルーブリック評価表を作成しました。理論から指導まで、理解度を確認しましょう。

## ■理解を深めよう

本章で学んだことをもとに、より理解が深まるような課題を提示しました。

## ■図書案内

本章の内容をさらに詳しく知りたいと思われた方のために、参考になる図書を少し紹介しています。本文中で引用している図書もあります。多少、難易度の差はありますが、手に入りやすいものを選びました。本書と併せて(批判的に)読んでいただき、研究や指導の向上につながれば幸いです。

## 謝辞

本書は、関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科門田修平研究室で先生と様々な時をともに過ごした有志が、先生の学際的で多岐にわたる活動への敬意と、私たちに手厚い指導・支援をいただきましたことへの謝意を込めて執筆しました。本書には、人間の認知や記憶に関する用語が多数登場します。第2言語習得が、指導者のテクニックや教材の検討にとどまるものではなく、その背後にある、人間の言語処理過程や認知メカニズムを基にした科学的なアプローチが必要であるという門田先生のお考えに執筆者が賛同しているためです。私たちは、本書が第2言語習得に携わる皆さまにとって、理論と実践を結ぶ架け橋となることを心より願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、くろしお出版の池上達昭氏に多大なるご尽力を賜りました。心より感謝申し上げます。

2024年3月 門田修平先生 関西学院大学退職によせて  
編者 川崎真理子・中西弘・西村浩子・三木浩平

# 目次

<b>第1章 音声言語における知覚・認知・記憶のメカニズム</b> .....	1
1. L2 のリスニングの難しさ .....	2
2. Rost (2016) のリスニングの処理過程 .....	3
2.1 神経学的処理 .....	3
2.2 言語的処理 .....	4
2.3 意味的処理 .....	6
3. 聴覚性プライミング .....	8
3.1 聴覚性プライミングの実験例：Matsuda (2017a) .....	8
3.2 聴覚性プライミングの実験例：Matsuda (2017b) .....	11
4. L2 の音声言語の知覚処理を促すために .....	13
<b>第2章 シャドーイングの認知メカニズムと指導法</b> .....	17
1. シャドーイングとは？ .....	18
2. 音声知覚の自動化 .....	19
2.1 シャドーイングが分節音の知覚・産出に及ぼす効果 .....	20
2.2 シャドーイングがプロソディの知覚・産出に及ぼす効果 .....	23
3. シャドーイングがもたらすその他の効果 .....	26
4. シャドーイングを用いた学習・指導法とは？ .....	27
<b>第3章 英語識字の習得メカニズムと指導</b> .....	31
1. なぜ文字が読める？ .....	32
2. 日本語の識字と英語の識字 .....	35
2.1 文字（書字）について .....	35
2.2 識字学習の進め方 .....	37
2.3 デイコーディング：文字—音対応規則 .....	38

2.4 流暢な読みへ.....	39
3. 識字学習・指導法.....	40
3.1 理論背景.....	40
3.2 実践例.....	42
4. 識字障がい・識字困難への理解と支援.....	44
<b>第4章 語彙処理のメカニズム.....</b>	<b>47</b>
1. 心内辞書(メンタルレキシコン)の構造.....	48
2. 語彙のもつ情報(形態、音韻、意味)へのアクセス.....	49
3. 語彙の認知処理に関する実証研究.....	51
3.1 同綴異義語とは?.....	51
3.2 単独で提示された同綴異義語の認知処理.....	52
3.3 文脈内での同綴異義語の認知処理.....	54
4. 語彙アクセスにおける流暢性(スピード)の測定.....	57
4.1 語彙の単独処理における流暢性(スピード)の測定.....	57
4.2 多重処理における語彙処理の流暢性(スピード)の測定.....	58
4.3 語彙処理の速度に注目することの重要性.....	59
<b>第5章 語彙学習のメカニズム.....</b>	<b>63</b>
1. 偶発的学習と意図的学習.....	64
2. 語彙知識の諸側面:形態・意味・使用×受容知識・産出知識.....	64
3. 学習の「量」(quantity of learning):繰り返し学習.....	66
4. 注意の「質」(quality of attention):一度でも深い学習.....	67
4.1 レベル1:気づき(noticing).....	69
4.2 レベル2:想起(retrieval).....	69
4.3 レベル3:多様な遭遇・使用(varied encounters or varied use).....	70
4.4 レベル4:精緻化(elaboration).....	70
4.5 レベル5:情動関与処理(Emotion-Involved Processing).....	72
5. 注意資源(attentional resource)と累積的な潜在記憶(implicit memory).....	73
6. 語彙指導のアイデア:4要素の観点から.....	74

7. 理論と実践の連関.....	76
<b>第6章 定型表現の処理のメカニズム.....</b>	<b>79</b>
1. 英語定型表現とは何か? .....	80
1.1 定型表現の定義.....	80
1.2 定型表現の分類.....	82
2. 定型表現の処理メカニズム.....	83
2.1 認知文法 .....	83
2.2 用法基盤モデル (Usage-based model) .....	84
2.3 定型表現の処理および期待される効果.....	85
<b>第7章 定型表現の学習のメカニズムと指導.....</b>	<b>95</b>
1. 英語学習者にとって定型表現の習得はなぜ難しいのか? .....	96
1.1 遭遇頻度が少ない.....	96
1.2 構成語が一般的で気が付きにくく、構成語から意味が推測しにくい.....	97
2. 定型表現の学習メカニズム.....	97
2.1 用法基盤モデルに基づいた言語習得論 .....	97
2.2 インタラクション.....	101
3. 定型表現の学習を促進させるための学習・指導とは? .....	102
3.1 インタラクションを通じた英語定型表現学習.....	102
3.2 多読・多聴を通じた英語定型表現学習 .....	104
3.3 音読を通じた英語定型表現学習 .....	106
<b>第8章 文理解のメカニズムと学習・指導法.....</b>	<b>111</b>
1. 統語処理は難しい? .....	112
2. 統語処理の心理メカニズム.....	113
2.1 統語処理とは? .....	113
2.2 統語処理を助ける手がかり.....	115
2.3 語彙情報の手がかり .....	116
2.4 音声情報の手がかり .....	118

3. 統語理解を促進させるための学習・指導法とは？	120
3.1 実践例	120
3.2 統語処理が促進されるしくみ	122
<b>第9章 オールイングリッシュ (学習言語) 指導理論と方法</b>	125
1. オールイングリッシュ授業とは？	126
2. 理論的背景	127
2.1 L1 vs L2	127
2.2 授業内言語使用に対する教師と学習者のビリーフ (信念)	129
2.3 CLIL (内容言語統合型学習) における translanguaging (トランスランゲージング)	132
3. オールイングリッシュを促進させるための学習・指導法とは？	134
3.1 指導案サンプル	134
3.2 授業内学習言語使用を熟慮した指導方法	137
<b>第10章 4 技能統合型の指導理論と方法</b>	139
1. なぜ4技能統合型の指導なのか？	140
2. 第二言語習得におけるインプット・アウトプット・ インタラクションの役割	141
3. TBLT	143
3.1 TBLT とは	143
3.2 タスクの定義と条件	143
3.3 タスクの種類	144
3.4 TBLT の流れと留意点	146
3.5 評価と教師の役割	150
3.6 TBLT の指導	151
<b>第11章 第2言語習得を促進させる認知脳ネットワークと     社会脳ネットワーク</b>	155
1. 認知脳ネットワークによる第2言語習得	156

2. 社会脳ネットワークによる第2言語習得.....	157
3. ミラーシステムをもとにしたプロジェクション(投射).....	160
4. 社会脳インタラクション能力を伸ばすオンライン国際協同学習実践..	164
4.1 国際相互交流の種類.....	164
4.2 オンライン型の国際相互交流.....	166
参照文献.....	172
索引.....	189

# 第1章

## 音声言語における 知覚・認知・記憶のメカニズム

### ■この章で学ぶこと

リスニングは学習場面でもそれ以外でも、リアルタイムの処理を求められることが多いため、第2言語<sup>1</sup> (L2) の場合、学習者が苦手意識をもつことの多いスキルだと言われています。特に学習初期の習熟度が低い段階では、音声知覚の処理に様々な困難を伴うことが知られています。L2の音声知覚の自動化については次章で扱いますので、本章ではL2の音声言語の知覚処理を促すために重要なことは何か、知覚・認知<sup>2</sup>・記憶のメカニズムを概観しながら考えていきます。

### ■自己診断テスト (○か×をご記入ください)

1. L2のリスニング活動では、聞いた内容をきちんと理解しているかどうかをチェックすることに重点をおくとよい。 [     ]
2. L2のリスニング活動では、音声に注意を向けるような活動を取り入れるとよい。 [     ]
3. L2のリスニング活動では、多様な音声情報を取り入れる<sup>3</sup>とよい。 [     ]

---

1 外国語として学ぶ場合を含めています。

2 ここでいう「認知」とは、知覚した情報を分析・解釈する過程のことを指します。

3 本章の後半では、「多様な音声情報を取り入れる」例として、話す速さや声量等が異なる、様々な話者の声で聞くことを挙げています。



## 第2章

# シャドーイングの 認知メカニズムと指導法

### ■この章で学ぶこと

本章では、モデル音声をほぼ同時に復唱することが求められる英語シャドーイング（以下、シャドーイング）を繰り返すことによって、英語音声の習得・コミュニケーション能力の習得にどのような影響を及ぼすのか、なぜそのような効果が得られるのか、様々な実証研究をもとに検討します。また、そのシャドーイングの効果を最大限に発揮させるためには、シャドーイング中にどのような活動・タスクを行えばよいのか、理論と実践の面から検討します。

### ■自己診断テスト（○か×をご記入ください）

1. シャドーイングは、極めて認知負荷の高い学習なので、初級者には行うべきではない。 [     ]
2. シャドーイングとリピーティングは、共にモデル音声を復唱するトレーニングであるので、どちらを学習に使用しても効果は変わらない。 [     ]
3. 発話者の顔動画を見ながらシャドーイングをすることで、英語音声の知覚や英語リズムの獲得が期待される。 [     ]

## 第3章

# 英語識字の 習得メカニズムと指導

### ■この章で学ぶこと

日本は、文字が読めない、すなわち識字できないということが理解されにくい社会でしょう。身近に文字が読めない人はいますか。本章ではまず、識字のしくみについて学びます。次に日本語と英語の識字のしくみの違いについて考えます。母語（日本語とします）の識字力の発達プロセスを十分に理解し、そのうえで、第2言語の識字の効果的な指導を検討します。識字の習得は個人差が大きいことや、そもそも生まれつき識字能力が低い識字困難という特性があることも念頭におかなくてはなりません。学習者を十分観察しながら進める適切な指導・支援を目指します。

### ■自己診断テスト（○か×をご記入ください）

1. 英語はアルファベットを覚えれば読める。 [     ]
2. スペリングは暗記するよう指導するべきである。 [     ]
3. 文字学習前の学習者にも、音声だけではなく文字も見せるべきである。 [     ]

## 第4章

# 語彙処理のメカニズム

### ■この章で学ぶこと

人の言語処理においては様々な認知プロセスが関わっていると考えられますが、語彙処理はその認知プロセスのほとんどの段階に先立って行われるため、特に重要性が高いと考えられます。本章では、まず語彙処理の前提となる心内辞書 (mental lexicon) に貯蔵されている語彙的知識にはどのような情報があるかを示します。次に、書きことばとして視覚的に提示された語彙の認知処理過程に焦点を当てます。その際には、特に同綴異義語というやや特殊性のある語彙項目を使用した心理言語学的研究を紹介しながら、語彙が単独で提示された場合と、語彙が文脈の中で提示された場合の認知処理過程それぞれに注目します。そして最後に語彙処理のスピード (流暢性) という側面に焦点を当てて、語彙力の測定方法を紹介します。

### ■自己診断テスト (Oか×をご記入ください)

1. 学習者が文字として書かれた英単語を理解するためには、文字による形態的な情報、音声 (音韻) 情報、そして意味情報の順に処理が進む。この順序は一方向的で、その他の順序は考えられない。 [     ]
2. 語彙力について考える際には、単語をどの程度たくさん知っているかという点と、それぞれの単語をどの程度深く知っているかという2点のみが重要である。 [     ]

## 第5章

# 語彙学習のメカニズム

### ■この章で学ぶこと

外国語学習には様々な側面がありますが、その中で最も根本的かつ重要なものの1つとして語彙学習が挙げられます。本章では、語彙学習の分類や語彙知識にはどのようなものがあるのかについてまとめたうえで、学習の成功のために重要な「量」と様々なレベルの注意の「質」について、豊富な実例や学術的知見を踏まえながら解説します。さらに、注意資源と累積的潜在記憶という最新の知見について紹介し、語彙指導の具体的な方法についてのアイデアを説明します。

### ■自己診断テスト（○か×をご記入ください）

1. 英単語とその日本語訳のペアを完璧に暗記できていれば、その単語をマスターしたといえる。 [     ]
2. 繰り返し学習しなければ長期記憶を形成することができない。 [     ]
3. 同時に覚えようとする内容が多すぎると、学習効果がかえって減少してしまうことがある。 [     ]

## 第6章

# 定型表現の処理のメカニズム

### ■この章で学ぶこと

皆さんは、これまでにタイトルに「英単語」「英熟語」といった表現が含まれている書籍を目にしたことがあるのではないのでしょうか。英語の受験対策や試験対策として覚えるべきとされる表現を掲載した本のタイトルによく見られるでしょう。本章で扱う「定型表現 (formulaic sequence)」は、「英単語」と「英熟語」の分類では概して「英熟語」のほうに含まれる表現です。では、皆さんは英語学習において英単語と英熟語のどちらを重点的に学習しますか、あるいはしてきましたか。筆者は、これまで英熟語よりも英単語を必死に覚えようと努力している学習者を多く見てきました。英語の運用能力を上げるには、どちらが効果的なののでしょうか。この章では定型表現とその処理のメカニズムについて見ていきます。

### ■自己診断テスト (○か×をご記入ください)

1. 英語定型表現は文法的な処理をせずに使うことができる。 [     ]
2. 英語定型表現は音韻的にも意味的にも全体として (ひとまとまりのように) 記憶 (心内に貯蔵) されている。 [     ]
3. 英語母語話者が使用する英語において定型表現が占める割合は、約 4 分の 1 と言われている。 [     ]

## 第7章

# 定型表現の学習のメカニズムと指導

### ■この章で学ぶこと

定型表現 (formulaic sequence) の知識は、処理負担の軽減、正確性・流暢性、コミュニケーション能力の向上をもたらすと言われています。しかしながら現実には、定型表現の学習に苦勞し、定型表現をコミュニケーションの場面で即座に使えない状態である学習者が多く見受けられるようです。それはなぜなのでしょう。また、どのような学習が定型表現の習得に効果があるのでしょうか。この章では、第2言語 (L2) 特に外国語として英語を学ぶ (English as a Foreign Language: EFL) 環境下の学習者が定型表現を習得する際の課題、またそれを踏まえ教師はどのような指導や教室での活動を行えばよいのか、学習者はどのような学習をすれば効果があるのかを検討します。

### ■自己診断テスト (Oか×をご記入ください)

1. 会話によるコミュニケーションのための学習素材として教科書は十分な定型表現を掲載している。 [      ]
2. インタラクションは、話しことばによるやりとりの際に生じるもので、書きことばによるやりとりでは生じない。 [      ]
3. 定型表現を使用した会話の活動は難しいので初級英語学習者には不適切である。 [      ]

## 第8章

# 文理解のメカニズムと 学習・指導法

### ■この章で学ぶこと

英語が苦手な学習者の多くは、文法の知識を使って文を正確かつ迅速に処理することができない（統語処理が自動化していない）ことがこれまでの先行研究で指摘されています。その原因の1つとして、英語が苦手な学習者は、単語に含まれる文法情報あるいは、音声情報（アクセント・イントネーション等）の知識があるにもかかわらず、文を理解する際に、それらの知識をうまく利用できないことにあります。この章では、英語学習者の統語処理の自動化（効率的に素早く行える状態）を促進させるためには、教室内でどのような活動やタスクを行えばよいのか、理論と実践の面から検討します。

### ■自己診断テスト（○か×をご記入ください）

1. 教師が、文法の規則を学習者に説明しさえすれば、学習者の英語運用能力が高まる。 [     ]
2. 教師が、英単語の意味だけでなく、品詞の情報も学習者に提示すれば、学習者の英語運用能力は高まる。 [     ]
3. 教師が、複雑な構造の文を学習者に示す際は、音声ではなく文字で示した方が学習者は理解しやすくなる。 [     ]

## 第9章

# オールイングリッシュ (学習言語) 指導理論と方法

### ■この章で学ぶこと

英語教師が担当科目を教えるときに、目標言語 (target language) のみで授業を行うのか、あるいは多くの学生の母語 (L1) である日本語で教えるのか、または両方の言語を使い分けながら使用するのかは、その教師の判断に委ねられていることが多いのが現代の日本の英語教育の現場です。また、“オールイングリッシュ”という言葉がよく使われますが、その定義は人によって様々です。本章では教師が英語を教える際に、どのように授業内で英語と日本語を使い分けて指導していけばよいのか、学習者たちの授業内言語使用についてのビリーフ (信念) を考慮しながら検討します。

### ■自己診断テスト (○か×をご記入ください)

1. 学習者は、オールイングリッシュ授業とは教師が 100% 英語で授業をすることを考えている。 [     ]
2. 教師は、オールイングリッシュ授業とは 100% 英語で授業をすることを考えている。 [     ]
3. 英語習熟度の高い学習者でなければ、オールイングリッシュ授業は苦痛である。 [     ]



# 第10章

## 4 技能統合型の指導理論と方法

### ■この章で学ぶこと

現行の学習指導要領(文部科学省, 2017ab, 2018)では、社会と連携・協働しながら実社会で活躍していくために必要になる資質や能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」が求められています。この「主体的・対話的で深い学び」とはどのようなものなのでしょうか。またそれは「技能統合」とどのように関係するのでしょうか。この章では、第2言語習得の理論に基づいた指導法を取り上げ、例を挙げながら見ていきます。

### ■自己診断テスト (Oか×をご記入ください)

1. コミュニケーション重視の授業では技能統合型の指導を行うことで、学習者は実際のコミュニケーションを疑似体験する。 [ ]
2. 目標言語を用いて課題を達成する「タスク中心の指導法(Task-Based Language Teaching: TBLT)」では、学習者に活動中に使用させたいターゲット表現・言語形式を提示し、前もって十分に練習させる。 [ ]
3. 目標言語を使用した活動において学習者同士で作業を行っている間に生じる目標言語の誤りを訂正するかしないか、どのように訂正するかなど、様々な見解がある。 [ ]

# 第11章

## 第2 言語習得を促進させる 認知脳ネットワークと 社会脳ネットワーク

### ■この章で学ぶこと

外国語習得が生起するしくみとして、小柳 (2020, p. 106) を参考にしつつ、大きく「ワーキングメモリ (認知脳ネットワーク) + インタラクション (社会脳ネットワーク)」の2つのしくみがあることを学習します。その上で、後者の学習を支えるミラーシステムをもとに他者運動を取り込むプロジェクション (投射) の考え方について検討し、最後に社会脳インタラクション能力育成の最適な実践として、国際協同学習「[にこP]」について解説します。

### ■自己診断テスト (○か×をご記入ください)

1. 英語の語彙・文法についての顕在的・明示的知識を得ることで、英語習得はほぼ達成できる。 [     ]
2. インタラクティブなコミュニケーション力は、言語知識を自動化、手続き化して無意識のうちに使える以上の能力が必要である。 [     ]
3. オンライン国際協同学習では、学習者の英語力の向上、また英語圏のコミュニケーションスタイルの習得という視点から、英語母語話者との交流をもつことが必須である。 [     ]